「日々の理科」（第 2257 号） 2020,-9,16

「アミタケというキノコ（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

少しずつ秋らしくなってきて、本格的なキノコのシーズンになってきた。雑木林にも針葉樹の森にも、さまざまなキノコがポコポコ発生し続けている。特に雨の数日後には、ここぞとばかり、大量に発生することがある。

先日も、カラマツとアカマツの混ざった森の林床に、薄桃色のキノコを見つけた。生物の同定は、図鑑と照らし合わせてするのが確実だが、一番大切なのは「勘」である。特にキノコの同定は、一目見て何の仲間なのかを勘でアタリをつける訓練が重要である。

幸い私はキノコに関してはかなり勘が良く、これは一目見て、イグチの仲間とわかった。イグチの仲間は、傘の裏側がシイタケのような「ヒダ」ではなく、管状の孔が多数あるのが特徴だ。

こうして、少し斜め下から撮影すると、その様子がよくわかる。何度もキノコを観察しているので、傘を上から見ただけで、裏側の様子も勘でわかるようになってしまったのだろう。

これは「アミタケ」Suillus bovinus というキノコだ。かつては「アミタケ科」や「イグチ科」に分類されたこともあったが、現在は「ヌメリイグチ科」に分類されている。傘の裏側には「管孔（くだあな）」と呼ばれる、小さな孔がたくさん見られる。

管孔はハチの巣状にびっしりと並んでいる。これは他の分類群のキノコでは見られる、アミタケの仲間に共通した特徴である。

縦に切ってみると、傘の付け根まで管状になっていることがわかる。この管の中に「担子器」が形成され、多数の胞子を管の下方に向かって落下させるのだ。